Vortrag 11.6.1995
Ms. bearbeitet 8.1995
abgeschickt 17.8.1995
1. Korr. 4.10.1995 – 6.10.1995
2. Korr. Ende 10.1995
publiziert Ende 3.1996
(erhalten Anfang 4.1996, Vorlage für Photokopie Mitte 4.1996)

(94)　印度學佛教學研究第44巻第2号　平成8年3月

Yājñavalkyaのアートマンの形容語とBuddhaの四苦

後　藤　敏　文

JOURNAL
OF
INDIAN AND BUDDHIST STUDIES
(INDOGAKU BUKKYŌGAKU KENKYŪ)
Vol. XLIV No.2 March 1996
〔88〕

Edited by
JAPANESE ASSOCIATION OF
INDIAN AND BUDDHIST STUDIES
(NIHON-INDOGAKU-BUKKYŌGAKU-KAI)
c/o Department of Indian Philosophy and Buddhist Studies
Faculty of Letters, University of Tokyo, Japan

(94)　　　印度學佛教學研究第44巻第2号　平成8年3月

Yājñavalkya のアートマンの形容語と Buddha の四苦

後　藤　敏　文

1. Yājñavalkya が二回の対論を通じて Janaka 王に ātman の教説を明かす Bṛhadāraṇyakopaniṣad [BĀU] Ⅳ 1-4 の最末尾に，ātman の修飾語として *ajára-*「老いない」，*amára-*「死なない」，*amṛ́ta-*「不死の」，*abháya-*「恐れない」の四語が現われる。*amára-*「死なない」と *amṛ́ta-*「不死の」とは一見同義に思われ，また，各語の必然性そのものについても，これまで特別注意が払われていなかったように思われる。当時の思想界の問題意識を背景に据えてこの点を検討し直し，更にその結果を Buddha の四苦と対比して，思想史的意義を探ってみたい：

(1)　BĀU (Mādhyandina) Ⅳ 4, 30-31 = ŚB XIV 8, 2, 30-31 *sá vā́ eṣá mahā́n ajá ātmà | 'járo 'máro 'bháyo 'mṛ́to bráhmā́-. ábhayaṃ vái janaka prā́pto 'sī́ti yā́jña-valkyaḥ.*[1] *sò 'háṃ bhágavate videhā́n dadāmi mā́ṃ cā́pi sahá dā́syāyéti. ‖ sá vā́ eṣá mahā́n ajá ātmā́ | ajáro (ātmàjáro) 'máro 'bháyo 'mṛ́to bráhmā́-. ábhayaṃ vái bráhmā́-. ábhayaṃ hí vái bráhma bhávati yá eváṃ véda.*「そのような，この，偉大な不生の ātman は，老いず，死なず，恐れず，不死であり，brahmaṇ なのだ。安泰（恐れなきこと）に，ジャナカよ，君は到達しているのだ」とヤージュニャヴァルキャは言った。（ジャナカは言った：）「この私は貴兄にヴィデーハの人々（＝国）を与えます。そして私をも一緒に，下僕として仕えるために」。そのような，この，偉大な不生の ātman は，老いず，死なず，恐れず，不死であり，brahmaṇ なのだ。brahmaṇ は安泰（恐れなきこと）なのだ。このように知っている者は，まさしく安泰である（ところの）brahmaṇ を自らのものとする[2]のである。

mahā́n ajá ātmā́ が一組の主語であることは，直前の M[ādhyandina] 29 ～ K[āṇva] 24 により明らかである[3]：

(2)　*sá vā́ eṣá mahā́n ajá ātmà | 'nnādó vasudā́naḥ. sá yó haivám annādáṃ vasu-dā́naṃ véda, vindáte*[4] *vásu.* そのようなこの偉大な不生の ātman は食物を食す者，

物（財産）を与える者である。そのような者として食物を食す者，物（財産）を与える者をこのように知っている者は，物（財産）を（自分のために）見出す。

2. ここに引用した帰結文から知られるように，Janaka 王が求めていたのは，恐れ（*bhayá-*），しかも，死，ないし，死後自己がどうなるかについての恐怖からの開放である。この意味でも，沙門果経 Sāmaññaphalasutta の Buddha と Ajātaśatru の対話との類似性が注目される。DEUSSEN, Sechzig Upanishad's des Veda（1897～³1938）456 は BĀU Ⅳ 1-2 の，brahmaṇ は何であるかに関する諸師の教説を列挙する，いわば戯曲化された学説史の部分について，沙門果経がこれを手本とした可能性を述べているが，王が希求しているのは，要するに，死と死後への恐怖を克服して恐れのない境地に達することであり，会話の枠組みと目的の全体に於ても，両者の共通性が顕著である。

2. 1. *ajára-*, *amára-*, *amṛ́ta-*, *abháya-* の四語はこの死後への恐れと直接に関連しており，単なる修飾のための語ではない。*ajára-* が「老いない，歳を取らない」，*abháya-* が「恐れない」を意味することは明らかである。*amára-* は文字どおりには「死なない」であり，*amṛ́ta-* が最も古い時代から[5]「不死の」，「死というものをそもそも持たない」ことを意味していたと考えることも認められるであろう。[6] それならば，*amára-* と *amṛ́ta-* との関係はどう考えるべきであろうか。これを解く鍵は，Upaniṣad の議論が，死後の自己の在り方を焦点の一つとして進展してきたこと，その元を遡ると，Brāhmaṇa 期に特にはっきりと話題に上っている，天界における再死への恐れとその克服を巡る議論に帰着する，ということの中にあると思われる。[7] ここでは，この種の観念が明確に現われている，最も古いと思われる例を紹介しておきたい：

(3)　Maitrāyaṇī Saṁhitā Ⅰ 8, 6 : 123, 18ff. *yó vái bahú dadivā́n bahv ī̀jānò 'gním utsādáyate, 'kṣit. tád vái tásya tád. ījānā́ vái sukṛ́to 'múṃ lokáṃ nakṣanti. té vā́ eté yán nákṣatrāṇi. yád āhúr, jyótir ávāpādi tā́rakā́vāpādī́ti, té vā́ eté 'vapadyanta. āptvā́ sthité tá idáṁ yathālokáṁ sacante yadā́mútaḥ pracyávante.* ひとが，多く布施をなし，多く祭式を行なった者として，［自分の］祭火を（死によって）片付けるならば，［彼の *iṣṭāpūrtá-* 祭式と布施の効力］は不滅なのだ。そのような（不滅の）それ（祭式と布施の効力）が彼のものとなるのだ。祭式を行なった善行者たちはかの世界へ到達するのだ。星座たちなるものは，そういうこの者たちなのだ。人々が「光が落ちたぞ。流れ星が落ちたぞ」という時には，そういうこの者たちが落ちているのである。［かの

世界に］到達し，留まった後，彼らは，かの世界から去り出るや即ち，それぞれの世界に応じて，ここ（地上）へと従う。

2. 2. Yājñavalkya は善い行為によって（*sādhukārī́*, *púṇyena kármaṇā*），（来世に）善く（*sādhúḥ*, *púṇyaḥ*）なる，つまり，よい状態に生まれ変わり，悪い行為によって（*pāpakārī́*, *pā́pena*），悪く（*pā́paḥ*）なる，という *kárman-*の説（M Ⅳ 4,6～K Ⅳ 4,5）を教えた後，*kárman-*の，従って輪廻の原因として欲望（*kā́ma-*）を指摘する。引き続いて，欲望のないひとの場合は輪廻を超越する旨をいう：

(4)　M Ⅳ 4,8f.（～K Ⅳ 4,6f.）*áthākāmáyamāno, yò 'kāmó niṣkāma ātmákāma āptákāmo bhávati, ná tásmāt prāṇā́ útkrāmanty. átraivá samávanīyante. bráhmaivá sán bráhmā́py eti* ‖ *tád eṣá ślóko bhavati* | *yadā́ sárve pramucyánte* ˈ *kā́mā yè 'sya hṛdi sthitā́ḥ* | *átha mártyo 'mṛ́to bhavaty* (*bhoti*) ˈ *átra bráhma sámaśnute.* 次に，欲望していないひとは，［つまり］ひとが欲望なく，欲望を離れ，自己（ātman）［のみ］を欲望し，欲望を達成した者となると，そのひとからは生体諸機能は出て行きません。ここ［にいる］ままで，統合（回収）されます。［彼は］ bráhmaṇ そのものなのですから，bráhmaṇ へ帰入します。それについて，次の頌が適用されます：「彼の心臓に位置している，全ての欲望たちが解き放たれるや即ち，すると，死すべき者は不死になる。この場合（または：ここ，地上で），彼は bráhmaṇ に到達し了せる」。

ここでは，*amṛ́ta-*「不死，不死の」が「生きている者が死なないこと」ではなく，「一旦死んだ者が天界で再死することなく，従って地上に再生することがない」という意味で用いられている。当時の哲学的・自然学的議論の次元では，死後，ひとは一旦天界（ないしは，それに類するよい存在）に生まれかわることが原則として考えられていた。上に引いた「悪い行為によって悪くなる」が意図しているのも，死後到達した天上等での状態を言うよりも，無論それとも関連するであろうが，そこでの再死を経て，次に地上に再生した時の状態を言うものと解釈される：

(5)　BĀU-M Ⅳ 4,5（～K Ⅳ 4,4）*tád yáthā peśaskārī́* | *péśaso mā́trām apādā́yānyán návataraṃ kalyāṇátaraṁ rūpáṃ tanutá, evám evā̀yáṃ púruṣa*[1] *idáṁ śárīraṃ nihátyā́vidyāṃ gamayitvā̀nyán návataraṁ*[2] *rūpáṃ tanute, pítryaṃ vā gāndharváṃ vā* [3]*brāhmáṃ vā prājāpatyáṃ vā dáivaṃ vā mānuṣáṃ vānyébhyo vā bhūtébhyaḥ*[3] ‖
［[1] K *ātmā.* [2] K はここでも *kalyānataraṁ* をもつ；M では Ed. KāśīSS が同様（二写本にこれを欠く旨注記)。[3] K ...*daivaṃ vā pr*° *vā brāhmaṃ vānyeṣāṃ vā bhūtānām.*］

それは，ちょうど，綾織りを織る女が綾織りの要素をほどいた後，別の，より新しい，より素晴らしい形を織るように，ちょうどそのように，この puruṣa はこの身体を打ち倒し，無知に赴かせた後，別の，より新しい形を［自らに］織ります，(すなわち) 祖霊に属する，または Gandharva に属する，または Brahmaṇ に属する，または Prajāpati に属する。または神々に属する，または人間たちに属する［形］を，または他の諸存在の為に［それぞれの形を]。

3. 以上のことを念頭において，Buddha の dukkha-「苦」を検討してみたい。初転法輪中に見られる四聖諦の教説の中で，苦諦は例えば次のように呈示されている：

(6) Vinaya I 10 : I 6,19 (cf. SN V 421 : LVI 11,5) *idaṃ kho pana bhikkhave dukkhaṃ ariyasaccaṃ, jāti pi dukkhā, jarāpi dukkhā, vyādhi pi dukkhā, maraṇam pi dukkhaṃ, appiyehi sampayogo dukkho, piyehi vippayogo dukkho, yam p' icchaṃ na labhati tam pi dukkhaṃ, saṃkhittena pañc' upādānakkhandhā pi dukkhā.* また，比丘たちよ，苦という高貴な人々にとっての真実[8] とは次のことである。生まれることも苦しい。老いも苦しい。病も苦しい。死も苦しい。好ましくない人々と一緒になるのも苦しい。好ましい人々と離れるのも苦しい。望みながらも得られないこと，それも苦しい。纏めて，五つの取得の蘊（枝分）も苦しい。

老・病・死が苦しみをもたらすことは明白である。BĀU に於ける不老・不死・無畏と比較すると，Buddha の教説に於ては，人間の通常の人生で避けられない苦しみという，いわば市民的次先での見方に重点が置かれていると言える。検討を要するのは「生」*jāti-* である。我々の一般生活で，理性の芽生える前の出来事である誕生について，それを苦しみと捕えることは必ずしも当然とはいえない。後の仏教スコラ学の伝統では母胎中と誕生時とに被る苦しみと解釈されているようであるが，[9] 老・病・死自体が *dukkha-*「苦しい」，つまり，「苦しみをもたらす」という本質を有することと対比させて考えると，誕生そのものが苦という本質を持つ，つまり必ず苦しみをもたらすものである，ということが意図されている筈であり，「誕生に付随する苦」は二次的問題と言わざるを得ない。そのような異なった次元の事柄を，インド自然学の，ある意味で頂点に達した時期に，Buddha が意図したとは考えられない。

4. 仏教でも，本来，輪廻の中での再生という意味で *jāti-*「誕生」[10] が言われていることは，改めて指摘するまでもない。D II 305,6-9 : XXII 18 は，苦の

列挙（例6に類似）に続いて，生一死一憂一悲嘆という一種の縁起の前提としての誕生という観点の下に，苦を与える誕生（「生」）を定義している（S Ⅱ 3は同一の文を十二支縁起の解説中に置いている，更に cf. Nidd Ⅱ 147：257）：

(7)　*katamā ca bhikkhave jāti. yā tesaṃtesaṃ sattānaṃ tamhitamhi sattanikāye jāti sañjāti okkanti abhinibbatti khandhānaṃ pātubhāvo āyatanānaṃ paṭilābho, ayaṃ vuccati bhikkhave jāti.* そして，比丘たちよ，誕生とは何であるか。個々の存在者たちが，個々の存在者の種の中に，生まれること，生まれ成ること，降りてくること，転現する（…へと転じ至る）こと，［五］蘊が出現すること，［認識機能の］働く場（六処）を受け取ること，これが，比丘たちよ，誕生（「生」）と言われている。[11]

引用文中の *okkanti*（*avakrānti-*, *ava-kram*）は地上より上の世界にいる輪廻の主体が母胎に降りてくるという観念を基に造られた語であり，Pāli, BHS, 古典 Skt. を通じて確立した表現である。[12] 先に引用した（3）(5）もそれを前提としているが，更に例えば：

(8)　BĀU-M Ⅳ 4,3 = ŚB XIV 7,2,3（～BĀU-K Ⅳ 4,2）*tḗna pradyotḗnaiṣá ātmā́ níṣkrāmati... tám utkrā́mantaṃ prāṇò 'nū́tkrāmati. prāṇám anūtkrā́mantaṁ sárve prāṇā́ anū́tkrāmanti. saṃjñā́nam evā̀nvávakrāmati, sá eṣá jñáḥ sávijñāno bhavati. táṃ vidyākarmáṇī samanvā́rabhete pūrvaprajñā́ ca.* その閃きを通って，この ātman は（外へ）出て行きます。…（上へ）出て行くそれに，気息がついて（上へ）出て行きます。ついて（上へ）出て行く気息に，全生体機能がついて（上へ）出て行きます。［かれらが］同意したところへと［ātman は］ついて降りて行きます。そうすると彼（ātman）は認識する者，識別作用を備えた者となります。彼に，（前世［までの］）知識と行為とが一緒に後ろからつかまっています。そして，以前の（前世までの）洞察力も［後ろからつかまっています］。

4. 1. 更に，仏典から，輪廻の中での再生という意味で *jāti-*「誕生」が述べられている箇所を若干挙げる。基本的には，生の繰り返しを苦と認識しており，この世を，楽園と見て死を厭うとか，地獄や苦しみに満ちた下位の存在からの救済と見る視点は欠けている：

(9)　D Ⅱ 30：XIV 2,18 = S Ⅱ 10：XII 10,2（縁起説への導入部）：*kicchaṃ vatāyaṃ loko āpanno, jāyati ca jīyati ca mīyati ca cavati ca uppajjati* (S *upapajjati*) *ca. atha ca pan' imassa dukkhassa nissaraṇaṃ nappajānāti jarāmaraṇassa.* 災厄に，なんと，この世は陥っていることか。生まれ，そして老い，そして死に（滅び），そして（天界等から）転退し[13]，そして（この世に）現われる。しかもなお，この苦しみからの出口

を，ひとは洞察しない，老と死とからの。

(10)　It 76：§83 (天人五衰)：*yadā bhikkhave devo devakāyā cavanadhammo hoti pañca pubbanimittāni pātubhavanti. mālā milāyanti, vatthāni kilissanti, kacchehi sedā muccanti, kāye dubbaṇṇiyaṃ okkamati, sake devo devāsane nābhiramatī ti.* 神が，比丘たちよ，神の群から転退する定めとなる時には，五つの前兆が現われる：花輪たちがしおれる。衣服たちが汚れる。脇の下から汗たちがわき出る。からだに容色の悪さが出て来る。神は自らの神の座に安らぎを見出ださなくなる，という［以上五つの］。

/神々　(—→外れ [出3る])　?

(11)　D Ⅱ 15：XIV 1,29 (誕生時の Buddha の雄牛の声 *āsabhī- vācā-*)：*aggo 'ham asmi lokassa, jeṭṭho 'ham asmi lokassa, seṭṭho 'ham asmi lokassa, ayam antimā jāti, n' atthi 'dāni punabbhavo.* 私は世界の第一人者・最上者・最勝者である。これは最後の誕生である。今や，再生は存在しない。

(12)　Sn p.16 *khīṇā jāti, vusitaṃ brahmacariyaṃ, kataṃ karaṇīyaṃ, nāparaṃ itthattāyā ti abbhaññāsi.* 生は尽くされた。梵行は住された。為されるべきことは為された。もはや（再び）このような状態（この世での生存）へと［至ることは］ない。と直観した。(～ M Ⅰ 139 ...*ti pajānāti*; etc.)

(13)　A Ⅱ 15，-4^{v} (Ⅳ 13) *sammappadhānā māradheyyādhibhuno ¦ te asitā jātim-araṇabhayassa pāragū ¦ te tusitā jetvā māraṃ savāhanaṃ te anejā ¦ sabbaṃ namuci-balaṃ upātivattā te sukhitā (ti).* 正しい努力をする者たちは，死の定めを征服する。そのような執着しない者たちは生と死と恐れの彼岸に至る者たちである。部隊を引き連れた (cf. Sn 442) 死神に勝利して，彼らは満足している。彼らは動揺しない。魔物 (Namuci) の全軍 (cf. Nidd Ⅱ 253：602) を凌ぎ越えて，彼らは幸福である。

(14)　A Ⅱ 12，20^{v} (Ⅳ 10)＝Ⅱ 52，23^{v} (Ⅳ 49) *sattā gacchanti saṃsāraṃ ¦ jātim-araṇagāmino* 誕生と死とを歩み行く存在者たちは輪廻を[14]行く。

5. これらの例から知られるように，Buddha の四苦（生―老―病―死）中に挙げられる *jāti*「誕生」も，本来，輪廻の中での再生を意味していたと理解するのが自然である。この，再生を苦と見なす考え方は，その否定として「再生しないこと」，つまり，「死後（天界で）再死しないこと」，すなわち *amṛta-* を理想とする BĀU の考え方に良く対応する。即ち，以下の表のごとく，Yājñavalkya の ātman の形容語と Buddha の四苦とは，肯定：否定の関係で対応している。更に，敢て推理すれば，人生を苦とする世界観が強く打ち出されてくる背景には，そもそも天界での再死を巡る否定的議論から発展してきた為，という側面があるのではなかろうか。

このように，初期仏典に現れる世界観，人生観は，古 Upaniṣad の生死観を受け継ぎ，その延長上にあると見ることができるが，BĀU における Yājñavalkya の ātman 論に見られるそれと比べ，輪廻に対する観念，思弁の一段階進んだ姿を示し，しかも，より普遍的に人間一般を対象とする性格が強い。しかし，あくまでも輪廻中の人間存在の在り方そのものを巡る思弁（縁起による世界理解）に中心があり，この世の中での出来事としての病，悩みなどは，どちらかというと副次的な議論対象に留まっていると見なしうる。[15)]

---

1)　BĀU-K[āṇva] では，M の 30 には IV 4, 23 の *eṣa brahmalokaḥ. samrāḍ enaṃ prāpito 'sīti hovāca yājñavalkyaḥ. so 'haṃ bhagavate videhān dadāmi māṃ cāpi saha dāsyāyeti* が対応し，最末尾の IV 4, 25 に M の 31 に対応する *sa vā eṣa mahān aja ātmājaro 'maro 'mr̥to 'bhayo brahmābhayaṃ vai brahma...* が置かれている。（K 24 はほぼ M 28-29 に当たる。）K 23 は M と異なり，Kaus. から作られた *prāpito*「到達させられている」を持つ。18 Up. (Ed. LIMAYE-VADEKAR) は *samrāṭ* の後ろに｜を置き，*enaṃ* で新しい文を始めているが，*enam* は文の二番目に来るべき Enklitikon である；*samrāḍ* の前で文を区切るべきかと思われるが，Vok. の直後は事実上文頭であり，いずれにしても異例である；cf. GOTŌ Fs. Thieme (1995) n. 13。

2)　一般には「このように知る者は，まさしく安泰であるところの brahman になる」と解釈されているが，K. HOFFMANN Aufs. II 557-559 が指摘する *idám bhū* の構文 (cf. GOTŌ I.Präs. 241 n. 528) と考えて，「brahman を支配する，管轄する，自らのものとする」と理解した。

3)　更に，M 23 = K 21 (Śloka) *ajá ātmā́ mahā́ dhruváḥ*「不生，偉大，堅固（不動）の ātman」; K 22 *sa vā eṣa mahān aja ātmā yo 'yaṃ vijñānamayaḥ prāṇeṣu ya eṣo 'ntar hr̥daya ākāśas tasmiñ chete*「この，生体諸機能のうちで識別機能よりなるものが，まさしくこの偉大な，不死のアートマンなのだ。［それは］心臓の内部にあるこの虚空，その中に横たわっている」（M は異なる；K II 1, 17 = M ib.: ŚB XIV 5, 1, 17 にも同じ文があり，同所が元かと思われる)。

4)　関係節に後続する主文が動詞で始まる場合，その動詞がアクセントをもつ（つまり文頭の価値を持つ）ことに関しては，例えば MINARD, La Subordination dans la Prose Védique (1936) p. 180f.: §658 の諸例参照。

5)　ただし，RV で *amŕ̥ta-* が具体的にどのように理解されていたかについては，必ずしも明らかではない。例えば，地上での 100 歳と死後の天界での永遠の生命とが合わせて考えられていたものかとも思われる。

6) *ajára-*, *amára-*, *abháya-* を，動詞の意味をそのまま受け継ぐ名詞を後肢にもつ限定複合語（cf. AiG Ⅱ-1 215）と解した。Pāṇini Ⅵ 2,116 は *ajára-*, *amára-*, *amitra-*, *amŕ̥ta-* のアクセントを（この順序で）Bahuvrīhi として教えている。アクセント位置をも含めてインドイラン祖語に遡る *amŕ̥ta-*（cf. av. *aməṣ̌a-* ＜ **n̥-mr̥to-*）は元来 Bahuvrīhi として作られたものであろう（cf. AiG Ⅱ-1 226, 295）。アクセントの異なる *ábhaya-* は実体詞である（おそらく，Bahuvrīhi **abhayá-*「恐れのない」からアクセント移動によって「恐れなきこと，無畏，安泰」）。

7) *punar-mr̥tyú-* の語自体は ŚB, TB, JB, KB, ŚĀ などに現れる。その観念が明確に表明されている箇所については S. Lévi, La doctorine du sacrifice dans les Brâhmaṇas (²1966) 95-97, P. Horsch AsS 25 (1971) 136f. 参照。更に，井狩彌介「輪廻と業」岩波講座東洋思想 6,『インド思想』2 (1988) 276-306 参照。

8) K.R. Norman, Collected Papers Ⅳ 171-174 参照（榎本文雄氏の教示による）。

9) Cf. Visuddhimagga p. 498-501（病 *vyādhi* についての解説を欠く）。仏教をも含めて，広く後の文献に見られるこの問題については，原実「生苦」，玉城康四郎博士還暦記念論集『佛の研究』(1977) p. 667-683 参照。母胎中と誕生時の苦とする解釈は，敢て想像するなら，死後地獄へ落ちるという観念がより一般的になった（ないし，議論の中により大きな比重を占めるようになった）後代に，誕生そのものを苦と考えることが必ずしも明白に妥当しなくなったことと関連するかもしれない。

10) *jāti-* は Veda 語には現れず，Skt. では「生まれ」即ち「生まれつき，本性，種，出自」の意味で用いられることが多い；Pāli 語で *jāti-* で表現される「生まれること，誕生，出生」という意味では，むしろ，Veda 語以来の *jánman-* が用いられる。後者の Pāli での用例は，PTSD, PTC によれば，Sn (Pārāyaṇa) 1018 *ādissa jammanaṃ brūhi*「生まれ（生年）に関して言え」のみである。

11) 以下，*jarā*, *maraṇam*, *soko*, *paridevo* 等について叙述され，*vyādhi* は現われない。この，誕生に関する列挙に時間的・過程的意味が帰せられるとすれば，*jāti* には動詞 *jan* の「[父親が子として生まれてくるべき胎児] を造る」という原義の力が生きていたのかも知れない。次注参照。

12) *ava-kram* については Windisch, Buddha's Geburt (1908) p. 31 参照。更に，医学書からの例：Caraka-Saṃhitā Ⅳ 3,3 *yadā cānayos tathāyukte saṃsarge śukra-śoṇitasaṃsargam antargarbhāśayagataṃ jīvo 'vakrāmati sattvasaṃprayogāt tadā garbho 'bhinirvartate*「そして，両者（健全な男女）のそのような状態での合体がなされた後，胎盤の内側に存する精液と血液との合体物へと，純質との結合に基づき，生命体（命我）が降りて来ると，その時，胎児が転現する」。*abhinirvartate* は例 (7) の *abhinibbatti* に対応する。

13) Pāli *cavati*, *cuti-* については Windisch, Buddha's Geburt p. 30f. 参照：Skt.-Text からは MuṇḍUp, BhagGītā, MBhār から例が引かれているが，例 (3) に挙げた Maitr.Saṁh. の *pra-cyávante* は注目すべき用例である。例 (10) をも見よ。

14) ひとは輪廻の外から輪廻へと赴くのではなく，すでに輪廻の中を流れ行くものであるから，「道の Akk.」と解釈すべきであろう。この用法は Pāṇini Ⅱ 3,5 に記述されていながら（*kāladhvanyor atyantasaṃyoge*「時と道とに完全に終わりまで関わ

る場合に [Akk. が用いられる]]），殆ど確認されていないように思われる（例えば DELBRÜCK Ai.Synt. 171：§118 を見よ）。Ṛgveda 以来の用例については別に発表する予定である。

15) 従って，生—死，ないし，生—老—死以外の *bhaya-*, *vyādhi-*, *śoka-* の検討はまた別の主題である。各種のテキストに現われる，いわば，苦悩の一覧表（例えば，ChU Ⅷ 4,1 Sanatkumāra の教説中の *jarā- mṛtyu-*, *śoka-*, *sukṛta-*, *duṣkṛta-*）の比較検討からも更なる視点が得られると思われる。

〈キーワード〉 Yājñavalkya, ātman, amṛta, 四苦, Upaniṣad と仏教。

（大阪大学教授，Dr.phil）